

(103) 栃木県上都賀群の鶏鳴鉞山跡

参考文献(1)では、この鉞山について3行だけの記述があるだけである。「・・・東武明神駅より2km・・・粘土脈で輝水鉛鉞、黄鉄鉞を伴う。」これでは、現地にたどり着きようがない。が、ネットで鶏鳴鉞山をキーワードに探すと、参考文献(2)にたどり着いた。鉞山・鉞物には関係のない、地震に関係した論文であった。本文は英文であるが、日本語の概要も付いていた。鶏鳴鉞山の廃坑内に、傾斜計を設置し、土地の変化を観測したことが述べられている。論文中には、観測点を地図上で示し、又、坑道の概略図、坑道入口の写真が掲載されていた。これならばたどり着けようと考え、この論文を手引きに、鶏鳴鉞山の探査に出かけた。

353号(+121号)を、鹿沼から北上してきたならば、上板橋地区で左折し、西に向かって進んでいく。東武日光線のガード下を通り抜け、長畑地区に入り、ゴルフ場の陸橋を通り抜けて、約600m当たりで、林道は分岐している。左手の先が鶏鳴鉞山跡らしい。林道に平行して沢も流れている。文献(2)では、坑口は沢の直ぐ脇にあり、坑道は北西方向に1kmも伸びていると記されていた。従って、沢の左岸(沢の北側部分)を、丹念に探査したが、坑口跡は見つけることができなかった。ただ、砂防ダムがあり、土砂も堆積しており、或は、この砂防ダムで埋められてしまったのか、或は林道の拡幅で、埋もれてしまったのかも知れない。終了。

その後、参考文献(3)を入手することができた。鶏鳴鉞山についての報告もあった。鉞山分布図中に、「鶏鳴」の文字入で、位置が明記されていたが、文献(2)とは、似ていそうで似ていないのである。その当たりに、鶏鳴鉞山があったはずであると、何度か探査を繰り返した。結果、2つの旧坑跡を確認した。が、沢との位置関係からすると、参考文献(2)の坑口ではないことは確かである。鉞山跡には通常幾つかの坑口跡がある。従って、位置的に考えて、見いだしたこれらの坑口跡は鶏鳴鉞山跡であろうと判断した。

探査日 2011年11月

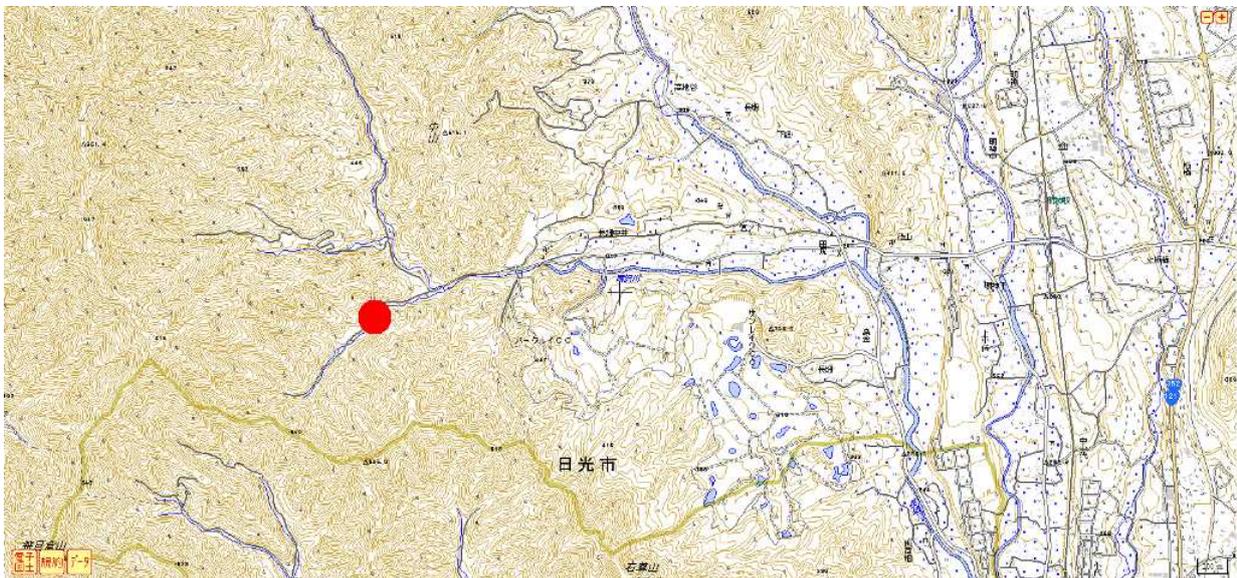


図1 国土地理院の地図サービスホームページより複写掲載。赤丸付近に2つの坑口跡がある。

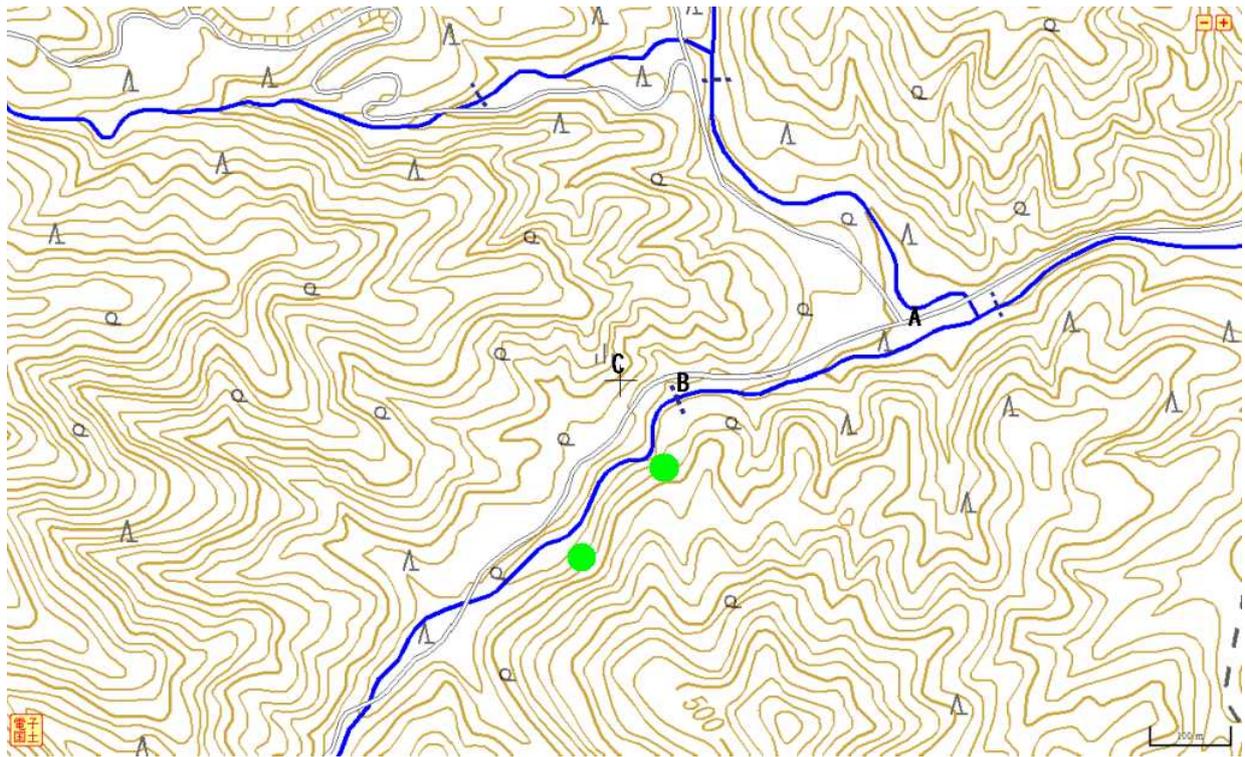


図2 図1の部分拡大図。黄緑丸が坑口跡。下流側の坑口は川底水準。上流側の坑口は川底から平行している古い林道に登り上がった先にあった。Aは林道の分岐点。Bは砂防ダム。Cは採石場跡らしい。山肌が広く露出している。鶏鳴鉦山と関係があるのかはわからない。

鉦山跡写真



写真1 ゴルフ場の跨線橋を過ぎて進んだ先にある分岐点。左側に入るが、このあたりから歩いて行こう。図2のA点である。



写真2 林道を歩いていくと、左側に砂防ダムがある。B点である。沢の右岸（沢の南側）にあった坑口跡。上部のほんの少しだけが開いている。林道からだとよくわからないので、砂防ダムの先当たりで沢に降りると良い。



写真3 坑口内の様子。



写真4 沢を更に上流に進むと、左手（沢の右岸）、林道の上方に、黒い穴があった。坑口跡であった。写真の真ん中の黒い部分、写真の中央左右が林道。手前に崩れがある。ズリのようなものもあるが、鉤石らしいものは見つけていない。



写真5 坑口内の様子。

採集鉱物写真

採集物は全くなし。

参考文献

- (1)「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢 編者、166頁、朝倉書店、1973年。
- (2)「今市地震の震央付近における土地伸縮および傾斜変化の観測」、萩原、力武、東京大学地震研究所、1951年、No. 28 (3/4)、435頁～441頁。
- (3)「栃木県上都賀郡内鉱山調査報告」、中沢、物部、地質調査所、昭和28年(1953年)。鉱物資源資料No. 2194。

参考資料

以下の参考文献(2)中の資料を複写掲載する。

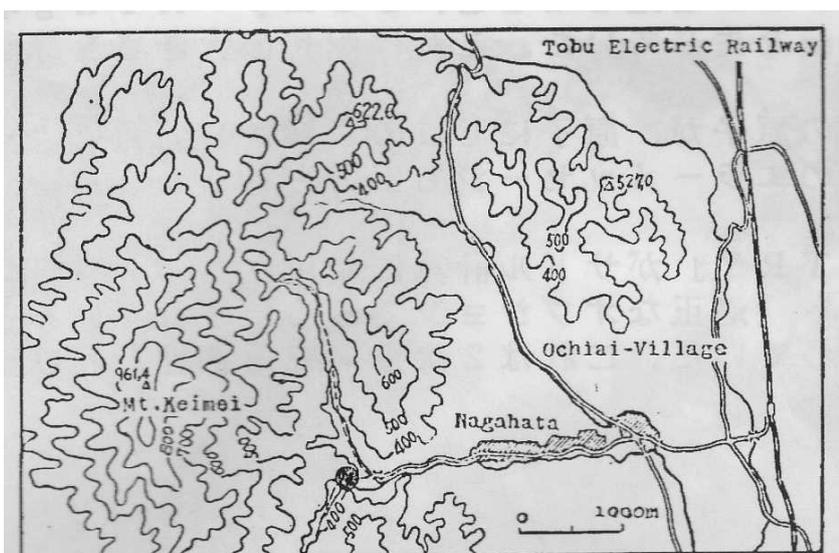


Fig. 1. The map about the observing point, which is indicated with black circle.

写真6 長畑地区の西方に黒丸がある。鶏鳴鉱山跡。

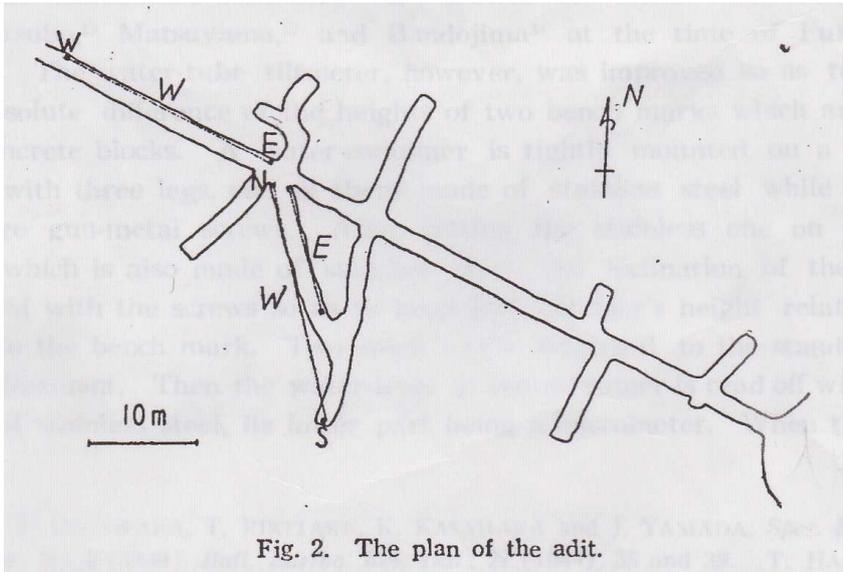


写真7 この坑道は、入口は沢底水準であり、北西方向に約1 km伸びている。



写真8 坑道の入口。×印を記している。

追記 鶏鳴鉦山の追探査

本鉦山は輝水鉛鉦（主成分モリブデン金属）を産出した。先の報告書ではこの鉦石については全く触れていなかった。現地で採集できていなかったからでもある。それ故、確認した坑口跡が鉦石を産出した「真の坑口」なのか、坑口が鶏鳴鉦山跡なのか、一抹の不安が残っていた。岩友がこの鉦山に興味を持ってくれたので、一緒に再探査をすることになり、数回の追探査で、小さいながら輝水鉛鉦の入った母岩を採集することができた。また新しい坑口跡も確認することもできたので、追探査結果としてまとめることとした。

ズリ跡と判断した箇所、小さい輝水鉛鉦の標本が採集できた。じっくり時間をかけて採集を行えば、この箇所でも輝水鉛鉦が採集できよう。

なを、再探査は残雪が残っていた日と、雪の無い日で行ったので、添付している写真の撮影日に違いがあることに留意。

探査日 2017年12月、その他

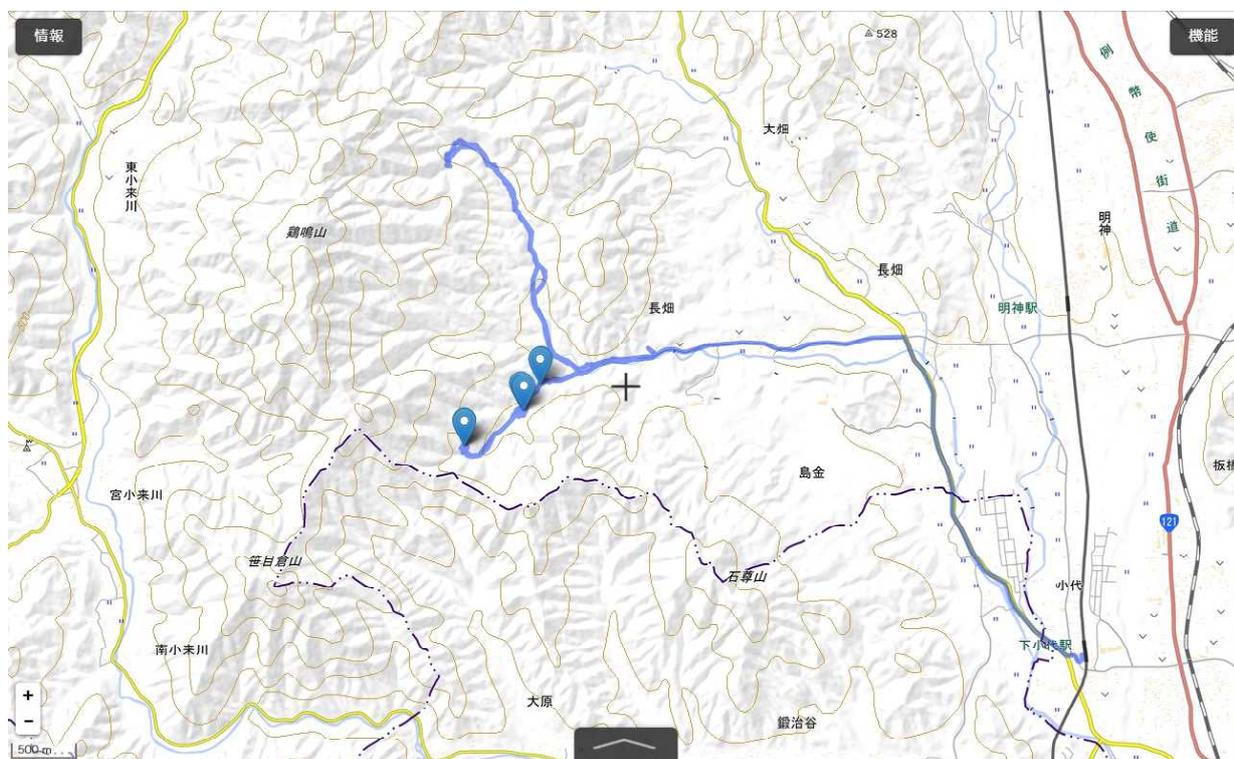


図1 ガーミンによる探査経路曲線図。東武日光線の下小代駅からのルートが青色曲線で描かれている。現地は本論と同じ場所なので、特に記述はしない。ついでながら、集合場所とした下小代駅前には、旧駅舎が現物のまま移設展示されている。古い駅舎であり、一見の価値があろう。図中で、マーキングの上に延びているルートは、他の鉦床の探査での軌跡である。今のところ、本内容には関係が無い。

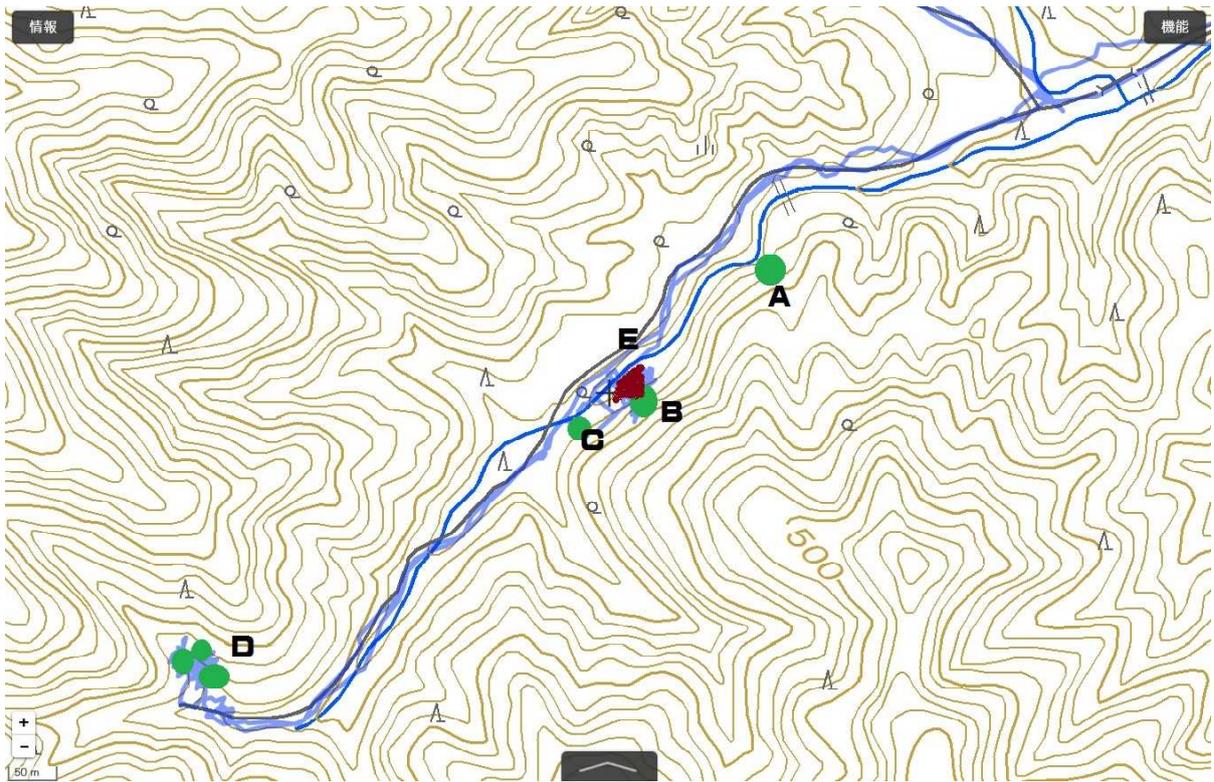


図2 図1の部分拡大図 A, B, C, Dは確認できた坑口跡である。AとBは既報の坑口。現在ではAはほぼ埋まってしまう、Bは僅かながら、坑口がまだ覗けていた。既報は2011年の探査であった。6年の経過で、現地がそんなにも変わってしまうものかと驚いた。とすれば、60年前、80年前に閉山した鉱山は、現在ではどんなに変わっているか、想像以上なのかも知れない。Cは川水準の坑口跡。中を覗くと、直ぐに行き止まっていた。Dには3つほどの坑口跡が確認できたが、奥行きがない、試掘坑跡か？ B点の坑口前Eの箇所、沢水準でズリを確認。努力の結果、ごく微量の輝水鉛鉱の入った標本が採集できた。

鉱山跡写真



写真1 図2のB点の坑口。写真の中央から右少し上の黒い箇所。本論の写真4の場所である。この箇所の再確認には、既報の探査記が役に立った。既報の写真2で示している坑口跡も既報の探査記で以て場所が確認できた。入口は完全に土砂で埋まっていたので、一見ではわからなかった。両方とも、草木の生い茂った時期には、本探査記を手引きにしないと坑口の確認はできないであろう。



写真2 写真1で示した坑口の近接写真。(注意：撮影日が違っている。)岩友の左手脇の黒い半月型が坑口。



写真3 写真2の坑口内部の様子。本論で掲載しているのと全く同じ。ただ入口が狭くなっていただけ。後数年で入口が埋まってしまうのかも。



写真4 上記坑口下の沢水準にズリを確認。ここで輝水鉛鉱付きの母岩が採集できた。ただ、この日は残雪があり、ズリの調べに難儀した。



写真5 沢面から見たズリ面の様子。



写真6 図2中のC点で確認した坑口跡。坑口はほぼ埋まりかけている。



写真7 写真6で示した坑口内の様子。奥行きはない、下半分が埋まっているのか、それとも試掘跡か？



写真8 地元の方に、上流に坑口があると教えられ、林道を登っていった。図2のD点で複数の坑口跡を確認。写真の右側、中央上、左側、がどれも奥行きがなかった。これらも試掘坑か？

採集鉱物写真



写真9 ズリで採集した標本。
ハンマーで一撃、破断面上に銀色
の輝水鉛鉱が光っていた。



写真10 写真9の拡大。確かに光り
輝いている。母岩の破断面の大きさは約
2 c m四方。

